一色城跡（本発掘調査B）

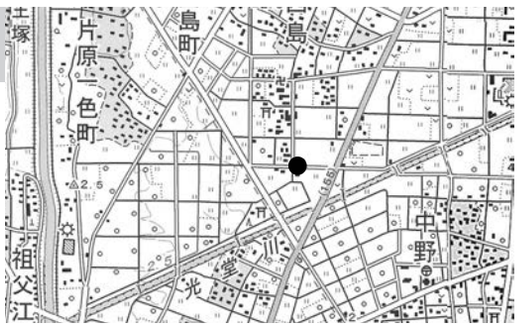
所在地　稲沢市西島本町
（北緯35度15分00秒　東経136度44分58秒）

調査理由　県道給父稲沢線道路改良工事

調査期間　令和元年7月～12月

調査面積　2,500㎡

担当者　樋上 昇・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「竹鼻・一宮・津島・清洲」）

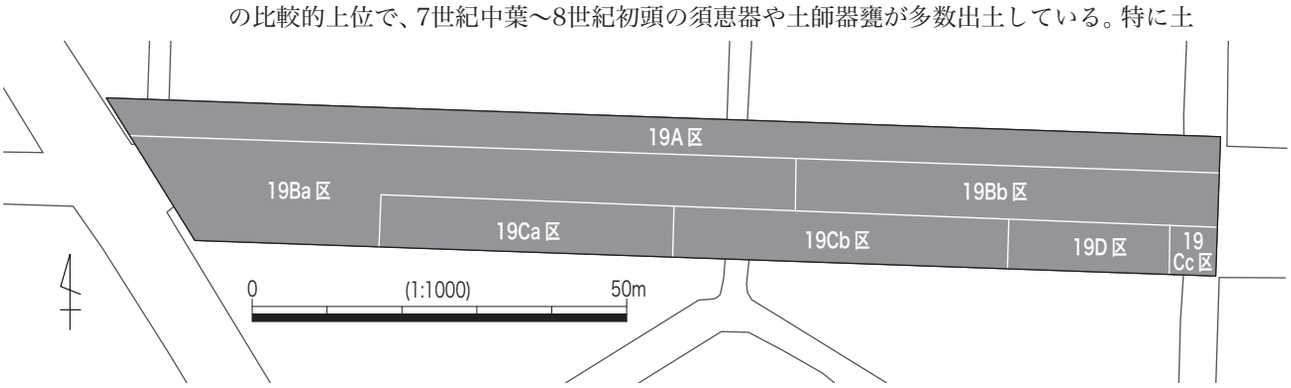
調査の経過　調査は、愛知県建設局道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。今年度の調査対象地は、東西約139mの現道および両側拡幅部分（幅計約18m）である。事業地内に現用水路や水田があり、また工事と併行する時期が生じたため、調査区は19A・19Ba・19Bb・19Ca・19Cb・19Cc・19Dの7区に分けられた。

立地と環境　遺跡は、尾張平野北西部の沖積低地に所在し、東に三宅川、西に日光川が流れる自然堤防地帯に立地する。今年度の調査区は、おおむね南北方向にのびる自然堤防を横切るかたちで設定されている。遺跡は、全体的に耕作などで上部が削平されている。そのため、遺構検出面はおおむね水平であるが、調査区東端で後背湿地とみられる凹地が検出されたことから、調査区東半部は、東および南方向への緩傾斜地形に相当すると考えられる。

調査の概要　検出された遺構は、古墳時代前期、飛鳥時代～奈良時代、室町時代～江戸時代である。とりわけ最大の遺構は、調査区西端で検出された一色城（戦国時代）の堀跡である。一方で遺物は、弥生時代後期の土器が若干あるが、飛鳥時代～奈良時代の土器が最も目立つ。遺構面は大きく2面あり、古墳時代前期～奈良時代の遺構が、砂質シルトの基盤層上面で黒褐色シルトの遺物包含層を伴って検出され、室町時代～江戸時代の遺構が、それらを覆う灰黄褐色シルト層の上面で検出されている。後者の灰黄褐色シルト層は、稲沢市域で広くみられるもので、調査区内では最大厚は約0.3mである。層中からは山茶碗が出土する。

古墳時代前期　19A区と19Ba区では、基盤層上面で古墳時代前期の溝と掘立柱建物跡が検出されている。溝530SDは概ね東西方向に約8.6m延びてその両端で南方向に湾曲しているが、その先は削平されていて不明である。溝とその周辺で出土した土器は、S字状口縁台付甕と高杯が主体で、時期は廻間式～松河戸Ⅰ式である。

飛鳥・奈良時代　19A区には、溝530SDの北側に併行して東西方向へ約24.5m延び、両端が調査区外の北側へ曲がる飛鳥～奈良時代の溝128SDがある。溝幅は約1mを測り、黒色粘質シルト層の比較的上位で、7世紀中葉～8世紀初頭の須恵器や土師器甕が多数出土している。特に土



一色城跡の調査区配置

師器甕は長胴の伊勢型で、横倒しの出土状況であることから、7世紀末までに溝の機能が停止していたと想定される。

一方溝128SDから東側では、主に8世紀の建物遺構が分布している。内訳は竪穴建物跡が18基、掘立柱建物跡が4基である。竪穴建物跡は、全形が判明したものはないが、平面規模は一辺が3.0～4.7mとみられる。これらは削平が著しく、大半が床面付近しか残存していないが、一部では壁溝や柱穴が検出されている。一方で、カマドやその可能性がある焼土遺構はほとんどみられない。遺構内からの出土遺物は小片が多いものの、特徴的なものとして、底部内面に「美濃」刻印のある須恵器杯1点や鉄鉢形須恵器が出土している。掘立柱建物跡の中には、布掘状の掘り方（19Bb区282SD）となるものが1基ある。当該遺構は出土遺物が寡少であるものの、竪穴建物跡を切り込んでいることが判明している。建物跡の方位は、正方位と斜方位が混在している。竪穴建物跡には古墳時代のものが含まれている可能性もあり、時期別にみた建物方位の変遷については今後の検討課題である。

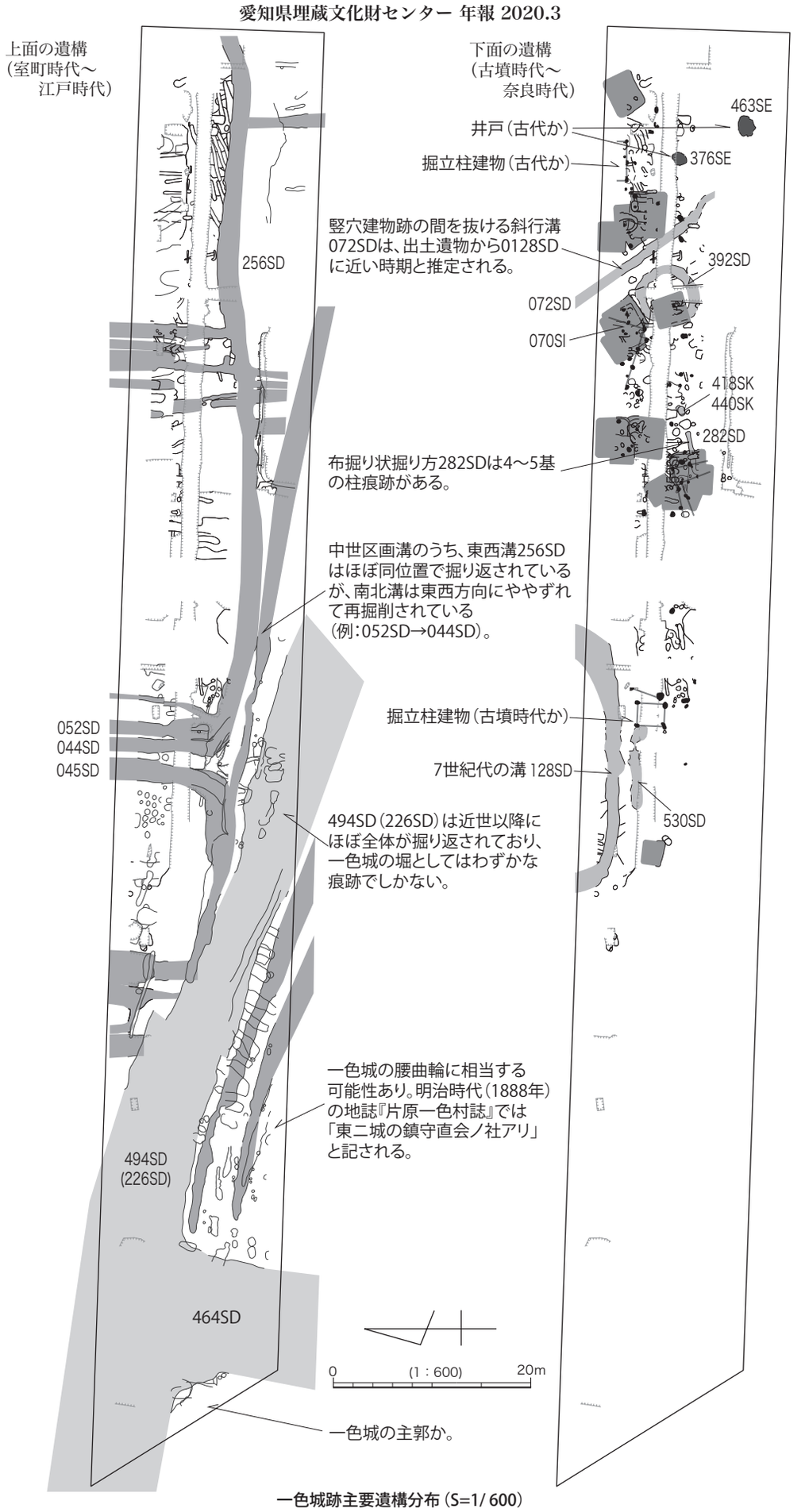
7～8世紀代に推定される特殊な遺構として、井戸2基と周溝状遺構がある。井戸は調査区南東部にある。井戸側などの構造物は未検出である。19 Bb区376SEでは焼土や炭化物の集積層がみられ、桃核が出土している。19D区463SEでは板状木製品が出土している。一方、周溝状遺構19Bb区329SD(19A区158SD)はやや不整な円形を呈し、外周の直径は約6.2mを測る。溝の断面は立ち上がり角度の急な逆台形で、深さ約0.3mを測る。堆積層の比較的下部で、7世紀末～8世紀初頭の須恵器杯が出土している他、遺構そのものを竪穴建物跡が切り込んでいることから、集落に先行する時期に構築されたと考えられる。遺構の性格を特定できる遺物はなく、中心部分に撹乱を受けているが、規模・形状から終末期の円墳の可能性がある。また当該遺構の西約9mの地点には、土坑墓と思われる長軸約1.1mを測る隅丸長方形の土坑440SKがある。埋土からは棒状鉄製品が出土している。

中世区画溝

8世紀の土器が出土する建物群が廃絶した後は、遺構・遺物の希薄な期間が続く。次にみられる遺物は、山茶碗の尾張第8～9型式である。遺構は区画状の溝群で、屋敷地を区画していたと推定される。最も溝群が集中するのは19Ba区で、並行する2条の南北溝がそれぞれ東と西へ屈曲して引き続き東西溝となる地点がある。2条の南北溝からは、溝群の中で最も中世陶器類が集中して出土している。溝間は道路だった可能性もあり、当該期に集落内の主要な場所になっていたと考えられる。一方、区画内の状況は不明な点が多く、若干の柱穴が、灰黄褐色シルト層の上から掘り込まれている程度である。

一色城の堀

19Ba区西端で検出された一色城跡の堀464SDは、南北方向に約12m分を検出した(19A区では撹乱により滅失)。規模は、幅約13.0m深さ約1.1mを測る。立ち上がりは緩く、断面形は逆台形よりも皿状に近い。堀底は旧河道の細粒砂層に到達しており、同層中には流されてきた樹木が多数出土している。これに対して堀の堆積は灰色粘土層で、断面観察では複数回の掘り返しが認められる。出土遺物は極めて少なく、底近くで16世紀代と考えられる漆椀が出土している。調査区北端には堀と東西方向の堀との交差点がある。東方向へは途中でやや南へ方位が振れている（19Ba区494SD、19Ca区246SD）。当該遺構の南側には、全体的に削平を受けたとみられる区画があるが、明治時代の地誌などから城の腰曲輪に相当するものと考えられる。また494SDでは、近世以降にほぼ全体を掘り返していることが確認され、溝として近代まで機能していたとみられる。これによって、北の西島村と南の片原一色村に分かれており、一色城跡は片原一色村に属している。



一色城跡主要遺構分布（S=1/ 600）

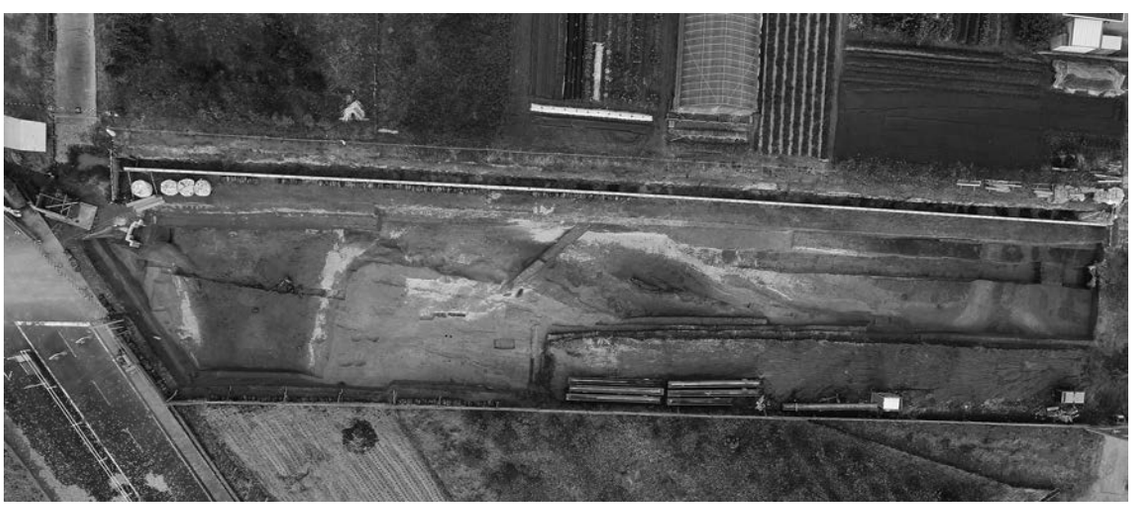
ま と め　一色城は、織田家の家臣である橋本氏が８代にわたって城主であったと伝えられ、特に橋本一巴は、織田信長に鉄砲を指南したことが『信長公記』に記されている。しかし17世紀初頭に廃城になった後は、『寛文村々覚書』などの地誌に片原一色村の「古城跡」として記されているのみで、その所在も不明となっていた。近年には地籍図からの推測もなされていたが、発掘調査で遺構が検出された意義は大きい。尾張平野には多数の中世・戦国城館が存在したことが知られているが、城主が判明しかつ具体的な規模が明らかにできた事例として特筆される。（永井邦仁）

遺跡全景（南東から）

土師器長胴甕の出土状況（128SD）

周溝状遺構 392SD（西から）

竪穴建物跡 070SI（北西から）



一色城の堀 464SDおよび494SD（上空から）